

言問い(こととい)：50周年記念植樹イチイに命名されたものです。

令和6年度 西春別中学校 第2号

こととい

令和6年4月30日 発行

＜ 校 訓 ＞
自 主 友 愛 有 能
＜ めざす生徒像 ＞
・自ら学び考える生徒 ・心と体を鍛える生徒
・協働する生徒 ・郷土を愛する生徒

発行責任者 校長 綾野 正巳



『不適切にもほどがある!』から感じる世相

西春別中学校長 綾野 正巳

新年度が始まって、3週間がたちました。入学した3名の新入生達もすっかり中学校生活に慣れてきた様子で、とても落ち着いた生活態度です。2・3年生も、学年が一つ進んだ自覚と誇りをもって、意欲的に学習や生活に取り組んでいます。全校生徒は16名と他校に比べて少ないですが、学校の中は活気に満ち溢れています。この人数だからできること、西春別中学校だからできることをどんどん探して取り組んでいきます。

少し前の話になりますが、テレビドラマ『不適切にもほどがある!』(TBS系)が人気と話題を集めていました。絵に描いたような“昭和人間”の主人公(中学校の体育教師)が、昭和61年から現代にタイムスリップし、昭和の価値観に基づいた発言や行動を繰り返して、コンプライアンス意識でがんじがらめになっている現代の人たちと衝突したり戸惑わせたりする内容でした。昭和人間の私は、ドラマを見て激しくうなずきながら大笑いせずにはいらませんでした。ただ同時に、微妙な後ろめたさを感じました。

あのドラマは、けっして「昔はよかった」と言おうとしているわけではなく、昭和の価値観や昭和人間を礼賛しているわけでもありませんでした。令和の時代に生きる私たち昭和人間は、自分たちの感覚と現代の「常識」とのあいだで、どうバランスを取っていけばいいのか、そんな大事な課題を突き付けられているように感じました。

昭和人間に限らず幅広い世代から注目されたのは、昨今の世の中にあふれている「不適切よばわり」に対して、おそらく多くの人が疑問を覚えているからではないでしょうか。なんでもかんでも「それは不適切だ」「それはコンプラ的に問題がある」「それは〇〇ハラメントだ」と言われると、少し違和感を覚えてしまいます。

令和が抱えている深刻な問題の一つは、誰もが「お利口さん」にならざるを得ないプレッシャーがまん延しているところにあるのではないかと感じることもさえます。ネットやSNSが発達して、お互いに鵜の目鷹の目で「批判できる対象」を探し合っている状況では、無難な“正論”ばかりがあふれることになり、たとえそれに違和感を覚えてもほとんどの人は口をつぐんでしまいます。そうすると、**自分で考えることをやめて、世の中の風向きに合わせて出した結論こそが「自分の考え」だと思ってしまうそうです。それでいいのでしょうか?**

もちろん、世の中全体をトータル的に見れば、昭和よりも令和のほうが多くの人にとって「快適な社会」になっていると思います。理不尽さの少ない社会と言っても良いのかもしれません。このせつかくの変化を台無しにしないためにも、「行き過ぎでは?」と感じる部分については、昔の良さもダメさも知っている昭和人間が、積極的に疑問を呈していけたらと思っています。

フランスの哲学者・パスカルの言葉「人間は考える葦である」を今一度認識する必要があるのかもしれません。

人間は自ら「考える」ことができます。せつかく与えられたこの力を無駄にせず、**子ども達には、まず自分の頭で考えてみる習慣を身に付けてほしい**と思います。もちろん、自分の考えた答が正しいかどうか分かりませんし、思考には時間も労力もかかります。でも、自ら考えて出した答こそが「自分そのもの」なのですから、**自分が自分らしくあるためにも「考える」**ことを大切にしてほしいと願っています。